厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
（総合）研究報告書

神経変性疾患領域における基盤的調査研究

研究分担者　望月　秀樹　大阪大学・大学院医学系研究科・教授

研究要旨

大阪大学データベースを元に、ADL、QOLに関わる脳内ネットワークを明らかにした。また、臨床調査個人票を分析し、本邦のパーキンソン病患者における認知症状との関連因子を明らかにした。

A．研究目的

①パーキンソン病のquolity of life (QOL)に関連する脳内ネットワーク、②認知症状と関連する因子を明らかにする。

B．研究方法

①大阪大学パーキンソン病関連データベース247人を対象に、QOL評価のPDQ-39と他の運動、非運動項目との関係、抽出されたQOL関連因子と安静時機能的MRIのデータを用いて、QOLに関連する脳ネットワークを検討した。

②パーキンソン病における認知症の発症に関連する因子を臨床調査個人票を用いて検討した。

（倫理面への配慮）

大阪大学データベースへの患者登録に際し、大学倫理委員会の承認と患者の同意を得ている。

C．研究結果

①PDQ-39と、すくみ足の他、転倒に対する不安、自律神経症状や抑うつ傾向など非運動症状が関連していた。また、安静時機能的MRIのネットワーク解析では、前部帯状回、右側頭頭頂接合部の機能的連結がQOL因子と関連していた。

②振戦は他の運動症状と異なり重症である方が認知機能障害の発症との関連がより少ないことが示された。非運動症状では、精神症状と認知機能障害の発症との関連が示された。

D．考察

① 前部帯状回や右側頭頭頂接合部は社会的活動や心の理論と関連していると考えられており、これらがパーキンソン病におけるQOLと関連している可能性が示された。

② 振戦は認知機能障害の進展への関与が他の運動症状と異なり、病態生理が他の症状と異なることが示唆された。

E．結論

パーキンソン病のQOLに関わる脳内ネットワークを明らかにすることができた。また、QOLに大きく関わる認知症状の発症とパーキンソン病に伴う他の症状との関連では、振戦は他の運動症状と異なる結果であり、特異な病態生理があることが示唆された。

F．研究発表

1．　論文発表
投稿準備中

2．　学会発表
該当なし

G．知的所有権の取得状況

1．特許取得
該当なし

2．実用新案登録
該当なし

3.その他
該当なし